

# 江戸の男性モード — 遊客の色彩表象、「通」と「いき」の美意識 —

Man mode in the Edo period — The color symbol of men's clothing in licensed quarters,  
An aesthetic sense to Edo —

大平雅美

Masami Ohira

日本大学

Nihon University

キーワード 男性服飾、文化史、江戸、色彩表現  
Keywords: Man's clothing, Cultural history  
Edo period, Color expressions

## 1 はじめに

上方の浮世草子を継ぐ遊里文学、洒落本から「通」と呼ばれた男性の服飾の変化を明らかにした前稿をもとに近世遊客の色彩表象の全体像を読み取る。洒落本は江戸中期以降発展した「衣装付け」と呼ばれるト書きを持つ独特の形式である。遊里の色男「通」たちは当初「黒」を好んだが、寛政期以降に遊里の客層が商人に代わると遊里を支配する色は、藍や御納戸色など現代で言う「青」へ変化した。「通」「いき」の用語は広く知られているが、色男達が求めた色とそれ以外の遊客の色彩表象を考察する。江戸時代は裏地にも気を配ったことから表着と裏地の色彩関係を合わせて考察し江戸男性の美意識を探る。

## 2 研究の方法と目的

洒落本作品、約650編すべてに目を通して色彩記述の有無を調べた結果、男女を問わず小袖、羽織、帯の色彩表記があるものは240作を超えており40%弱に色彩の衣装付けが記述されていた。そこで前稿の表1（追加版）と表2（男性服飾全般）を作成し時間の経過に伴う表象の変遷を追った。

## 3 考察と結果

### (1) 遊里における「通」・「いき」の色

洒落本の成立は享保13年（1728）であるが、洒落本が最も描きたかった「通」という視点を体現する「通人」という語が初めて登場したのは『古今吉原大全』（1768）である。「瀟落を表とし。人品高上にして。実を裏とし。風流をもつてあそぶを。真の通人といふ」（洒落本大成5巻）と表現されており、その風俗は主に黒羽二重である。『間似合早粧』（1768）でも「衣装は当世外いろいろはやれどもつまる所は黒がよし」とある。その後「通」の失墜を経て登場したのが藍色、花色、御納戸色を身につけ

る江戸の通士「異気仕立て」と、通ならず野暮ならずの「不通」の男である。この寛政期に遊女にもてた男の服装として「あいおなんどのつむぎのはおり、上着もついのあいおなんど、花色しゅすの帯」『三人酩酊』など江戸の遊里は色彩が一変する。したがって洒落本にみる「通」の主な衣類の色は「黒」、「意気・異気・いき」と呼ばれた男の衣類は「藍」中心であったことが読み取れた。

### (2) 遊里で好まれた衣類別の色

（遊里全体で表象された色彩を分析する：表参照）

【小袖】宝暦・明和期と地味な中にも明るい色で推移していた色が安永期で色数を含めピークを迎える。これは遊里全体が潤っていた全盛期と重なり、「大通」と呼ばれた富裕町人が羽振りを利用した頃である。注目は小袖の裏色で、それまでの御納戸茶から萌黄や空色といった明るい色が裏地に登場し「底至り」の始まりと言える。その後江戸バブルが崩壊し飢饉が増えた天明期は、黒茶の憲法色や鼠など地味な色が増える。こうした色彩が大きく変化したのは寛政期で御納戸系の色が遊里を席卷した。文化文政期に向けては茶色が増える。鼠に関しては興味深いことに遊里で身につけている人物は冴えない男であることが多い。

【羽織】小袖と比較すると色数は少ない。安永・明和にかけては黒と茶色がほとんどだが、ここでの注目は安永・天明期の人気色、鶯色である。天明3年（1783）『彙軌本紀』に当世流行したものとして「ひわ茶とび茶大名縞。長羽織…」とある。しかしこの色を好んだのは「きをい」と呼ばれる男伊達を気取った者達で、「通」とはまったく違う存在である。その後の寛政期では御納戸や藍色が主流となる。文化文政にかけて茶色が一気に増えるのは小袖と同じである。新しい色名が多数登場する。鼠色に関しては寛政期以降に表着も裏も衣装付けにない。小袖と羽織の組み合わせは、藍系の濃淡や茶系のグラデーションとして表象されている場面が多い。配色については別の機会に詳しく紹介したい。

【帯】帯は着物において重要なアクセントである。

時代ごとに大きな変化が見える。最大の特徴は安永期の「腹切帯」の流行で「緋色」が何度も登場する。これは主に通人が締めたと考えられるが、他も藤色や空色、花色など明るい色が多い。黒色の帯は江戸を通して人気だったがこのバブル時期だけ存在しないのは興味深い。寛政期は御納戸、花色の全盛である。文化文政期以降は茶系の帯が増え、歌舞伎の人気色も見える。

#### 4、まとめ 鼠・茶・藍の変遷

茶色は江戸全期を通して人気色であったが、洒落本では前期の黄味の茶から緑味の茶にシフトしているのが読み取れる。青は寛政期の藍と御納戸色が最大の変化である。前期の空色、浅黄などから濃い色への変化が認められる。鼠は遊里では低調で遊客には人気がない。これは今後考察が必要である。結論としてこれまで詳細に検討されなかった近世男性衣類の変化だが、本研究により江戸中・後期に遊里で好まれた衣類表象の色彩が明らかになった。

	宝暦 (1751~63)	明和 (1764~71)	安永 (1772~80)	天明 (1781~88)	寛政 (1789~1800)	享和・文化・文政以降 (1801~29)
<b>小袖 (表)</b>	空色、花色 丁子茶 蔦色 鼠、黒	藍さび、浅黄 御納戸茶、茶 鼠、黒	空色、花色、藍さび 浅黄 御納戸茶、 茶、青茶 蔦色、 黒 灰毛色	藍、 茶、蔦色 茄子色 柳鼠 湊鼠 憲法、黒	藍、鉄御納戸 藍御納戸 茶、憲法 どぶ鼠、鼠、濃鼠	藍御納戸、御納戸、藍 茶、丁子茶、 鼠、松葉色
<b>(裏)</b>	御納戸茶	御納戸茶	空色、萌黄、 青茶、黄唐茶	花色 御納戸茶	花色、藍 鼠	御納戸
<b>羽織 (表)</b>	こげ茶、丁子茶 黒	黒	黒、黒蔦 蔦 茶、媚茶、蔦茶	黒 蔦茶、茶 鼠	黒、憲法 藍御納戸、藍、御納戸 藤鼠、鼠	黒、憲法、紺、鉄納戸、 当世茶、生壁色、干歳 茶御納戸茶、茶、
<b>(裏)</b>	御納戸茶	—	紺、御納戸茶、媚茶	鼠	藍、鼠	黒、御納戸茶
<b>帯</b>	媚茶、当世茶、 鼠	茶、鼠 黒	紺、空色、花色、 鶯茶、茶、 緋色 藤色	花色、黒 御納戸茶、こげ茶	藍御納戸、花色、 媚茶、鼠、藤鼠、黒	花色、納戸 芝親茶、媚茶、茶
<b>織物 模様 (遣)</b>	無地 『色道大鏡』 (1678年)	羽二重、縮緬 嶋、縦横縞、 小紋	羽二重、縮緬、 小紋、縞(嶋)	羽二重、縮緬、上 田、結城、八丈 紬、嶋(縞)、小紋	八丈、紬、棧留、竜紋 縞子、縞、上田、結城 縮緬、嶋(嶋)、小紋	竜紋、上田、結城、八 丈、羽二重、紬、縮緬、 嶋(縞)、小紋

表1 江戸男性服飾の色彩・模様一覧 (史料:『洒落本大成』(1-29巻)中央公論社)

	宝暦~明和 (1751~71)	安永 (1772~80)	天明 (1781~88)	寛政 (1789~1800)	享和・文化・文政以降 (1801~29)
<b>茶色 (全16色)</b>	御納戸茶 蔦色 茶、媚茶、当世茶 こげ茶、丁子茶	茶、鶯茶、藍海松茶 黄唐茶、青茶、御納戸 茶蔦色	茶、蔦色 鶯茶 御納戸茶、こげ茶	茶、媚茶	茶、生壁色、御納戸茶 干歳茶、丁子茶 柳茶 媚茶、路考茶、芝親茶
<b>鼠 (全7色)</b>	鼠	鼠、灰毛色	柳鼠、湊鼠(深川鼠)	どぶ鼠、藤鼠、鼠、濃鼠	鼠
<b>青 (全9色)</b>	藍さび 空色、紺、花色 浅黄	紺、花色、 空色、藍さび 浅黄	藍、花色	藍、御納戸、 花色、藍御納戸 鉄御納戸、紺	藍、御納戸、藍御納戸 花色、鉄納戸、紺
<b>その他</b>	黒、緋色、紫	藤色、緋色、江戸紫、黒 黒蔦 蔦、	黒、茄子色、憲法	黒、憲法	黒、松葉色

表2 洒落本における男性服飾の色彩抽出表 (史料:『洒落本大成』(1-29巻)中央公論社)

- 【参考文献】 1) 拙稿、洒落本における男性服飾—「黒」から「青」への色彩変化—国際服飾学会 2008 no33, p47-60  
2) 本稿で引用した洒落本はすべて『洒落本大成』1-29巻(中央公論社 1978-1988)